

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十年九月十五日發行(毎月一回・十五日發行)

(通第七十八号)

慈

光

目

捨身と建現……………卷頭言……………(1)

常音先生を憶ふ……………柳瀬留治……………(2)

夢の感想……………福島政雄……………(3)

歎異抄の何処か……………池山栄吉……………(7)

ジャータカ物語…………………………(12)

次

第七卷 第九號

捨身と建現

独乙の哲人シユブランガー氏がその著文化病理学の序文に『個人の場合においても「死して生れよ」といふ試験の淨火をくぐらぬ人間が、決して自己の最後の完成にまで到り得ないのと同じやうに、国民といふ大きな存在にとつてもまた、その悲劇的な懐滅の中から、再生への高き義務づけと、大いなる更生力とを生み出すことの出来得るときにおいてのみ、新しい光につつまれた將來が約束されるのあらう』と述べて、同じ敗戦の惨状下に立つ日本国民へ呼びかけてゐる。

想ふに、敗戦の瀬戸際に、全責任を御一身に荷負せられて、先づ身を御捨て下されたのが、天皇さまであつた。そのことは、今度重光外相がマツクアーサー元師の訪うた時の談話の發表で明かとなつた。

『これには私（元師）も驚いたのであるが、天皇が最初に戦争責任の問題を取上げた。ほんとに驚いたのだが、天皇は次の様に言明した。

『私は戦争の遂行に關与のある、あらゆる事態に全責任をとりたいたいと思ふ。私は日本のすべての軍司令官や政治家のやつたいろ／＼な行動の責任をとる。』

三週忌に常音先生を憶ふ

『炭を離れて火はなく、薪を離れて火はない』といふことを屢々思ひ出すのです。それは近角常観先生、常音先生から常々お聞かせ頂いたことなのです。

私は生活上、折々苦難にぶつかり、心のやり処なくなつた時、胸にこみあげてくるのが、自分の業といふことです。其時忽ち先生が眼前に現はれて、

『されば、そくばくの業を持ちける身にありけるを、助けんと思召したちける本願のかたぢけなきよ』

と誦み聞かせて下さる声が聞えて来るのです。そして『火といふはなぬ、このして見ようのない我々の業が可哀想で、ついて離れて下さらぬ、仏とはその火なのである。この仕て見ようのない私を憐んで、ついて離れて下さらぬ火。炭を離れて火はないと同様、このして見ようのない我々の悩み苦しみを離れて火はない。仏とはこの苦しみを憐んで、ついて離れ給はぬ御心である。』

火は如何なものでも焼き尽すやうに、我々が仏のみ心に双尙つて、私は信じられません、喜べません、こんな冷や

私の運命の今後について、貴下がどのやうに考へて居られようとも、どしどしそのようにして頂きたい。私は全責任を引受ける。

と云はれたのである。天皇の果した役割が、これまで正當に評価されたことはない』

『平和条約の締結後に現れた祝福すべき成果に、最も貢獻した人は、天皇その人であると確信してゐる』

斯うした記事を九月三日の朝日新聞で読み、當時をしるび、現時をかへりみて、慚、謝、こも／＼である。

『散るときが浮ぶときなり蓮の花』

『大死一番、絶後によみがへる』

との妙諦を、国家全体の滅亡するといふ大断崖に直面せられて、率先して捨身して下さつた、御自身に全責任を背負うて下さつて、如何様なりとも、と御身を投げ出して下さつたのである。この一事は、日本の名のある限り銘記し伝承し、以つて吾等の光明と仰がねばならぬ。

柳 瀬 留 治

かな氷の様な心ですと、仏の御心をはね退ける。

ところが、青竹を出せば青竹を、生木を以て払ひ退けんとすれば、それに燃え移つて、火にしてしまはれ、ああ恐れ入つたと謝り入り、恐れ入るの外はない』

と、身を以て、御自身の胸の火を示して下されるお姿が目に見えて来るのです。

又しても私が、自分で思ふ様になるものと思つて、物にぶつかつては悩む、苦しんだ挙句に、

『ああこれが自分の業なんだ、だから唯念仏だと仰やるのだ』

と気付かして貰つては、念仏に蘇らせて頂き、重荷のすべてを仏に打ちまかせて、身軽な、すが／＼しい心にして頂き、何といふ仕合せなことであらうと思ふのです。

私の中にありとあらゆるもの、醜いもの、悪いもの、誰にも言へないもの、それをみんな放り出して、みんな背い

て貰えるのは常音先生であつた。

先生の前に何を放り出しても、にこ／＼笑ひ乍ら『うんさうだらう』とおつしやる。

やがては、先生のお顔を一目見ると、一言もいふことなく胸が空つぽになり、救はれてしまふのです。言はない前に皆知つてしまつてゐて下されるのです。

先生を通じて仏の慈しみの深く、広く、隈なく、私を見抜いて下されることが判り、何と気楽な世界であることかと、念仏を唱へながら、今も道を歩いて家に帰つたことです。そして長い間お育て頂いた先生が慕はしく、遙か安養界から見そなはず先生のみ心に、ひたひた触れる思ひで、戻つて来たわけです。

常音先生がお亡くなりになつてもう二年を迎へようとしてます。先生がいられなくなつたことは淋しいには淋しい。だが、念仏を唱へると、いつでも先生が出て来て、ぢかに会つて下される。

夢の感想

明慧上人に夢の記といふのがある。色々の夢を書いてい

は釈尊の御前で華嚴経を誦講なされたといふ夢もある。

高僧の聖夢と比べられるものではないが、私も夢を見ることは多い。ろくでもない夢や、取とめのない夢が多いけれども、稀には此の私でも善い夢を見ることがある。

昭和二十六年十二月二十六日の暁の夢に、亡き父の前に法華経を語る夢を見た。これは私としては嬉しい夢である。亡き親を夢に見るといふことは滅多にない、私が父の前に法華経を語るといふ夢を見たのは珍らしいことである。法華経は私が廿四才の時に始めて読み、四十五才の時に法隆寺で御講義をきいて、始めてその深義に目がさめるやうになつたといふ因縁深いお経である。

たらちねの父の御前に法華経を語ると見しよ暁の夢にたらちねは逝きまして遠し人の世の淋しき道をつくづくとおもふ

夢を見たあとの歌である。

二十八年の十月二十日から不凶夢の記を始めた。もつとも長続きはしないで、二十九年の一月まで時折に見た夢の中から、多少でも意味のあるやうなものを書きとめてお

釈尊が入滅されんとして『われ、阿闍世の為に涅槃に入らず』といはれた。その如来常住にして変易あることなき大悲のかたぢけなさを、大先生がよく仰つて下された。そのお言葉が今もありありと聞えて来る。

又常音先生が亡くなられる寸前に『死にたくないな！』と、いはれたさうである。それは名残り惜しいお心であつたことと思はれるが、私には、今一緒になつて、感慨無量な思ひになつて来ます。

死にたくなくとも死なねばならぬ、誠に淋しいことですが、いかにも淋しいであらう、この念仏一つだ、と、死んでお行きになつたことだらうと思ふのです。

私も年をし、前に横たはつてゐる死を思ふ時、とても空虚な淋しさにたちあたります。その時、常音先生の其一語に感慨無量な思ひが致します。

昭和三十年八月六日 稿了。

福島政雄

られるが、さすがに聖い高僧の夢であつて、その夢の中に

たのである。その中から二三拾つて感想を述べて見たいとおもふ。

その十月二十日の朝の夢は、ソクラテスのことであつた。ソクラテスのことを誰かに対してはつきりと話してゐる夢を見たのである。ソクラテスの臨終のところを話したところで夢はさめた。

私は西洋滞在二ヶ年の間にソクラテスに心を寄せるやうになつた。文献によつてソクラテスに接して、私はその足下にも近づけないといふ感じを持つたが、併し強いソクラテスが、敬虔な心持で神々の心に随ふといふところに深く感じた。私自身の弱いことを感ずると同時に、ソクラテスも私を絶対他力の大道において進ましめる善知識であることを次第に感ずるやうになつた。ソクラテスは毒刑といふ死の道に当面してゐながら

『若しこれが神々の御心になふならば、それで宜しいのである。』

といふ心持をもつて、最後の瞬間まで、落ちついてゐた。私は到底その真似も出来ない身であるけれども、此のソクラテスを景仰してゐるのである。

十一月五日の暁には、近角常観先生の御写真のことを夢に見た。近角先生の六十才に近い頃のお写真であつたが、

私は有田武夫さんから頂戴したのを大切に持つてゐたのを、一ヶ年間明石にひとりで行つてゐた間に、明石で紛失してしまつた。どうして無くなつたかわからない。慚愧にたへぬことであるが、どうしてもわからぬのである。それが氣になつてゐるのでこんな夢を見たのであろう。

近角先生は私を親鸞聖人の信仰の道によびさまして下された第一の善知識であらせられた。而して二十八年間といふ長い間、私をお育て下さつたのである。

御往生の後には御写真を大切に私に書齋にかかけ、明石の仮の下宿まで持つて行つた。それを無くしたといふのは私として何といふことであらうとしみじみおもふ。明石から東京の方へかへる引越の時に荷づくりを数人の人に頼んだ時、どこかに取りおとしたかも知れない。それにしても合点の行かない、まことに相すまぬことである。

十一月八日の朝は歎異抄の夢であつた。歎異抄についてお話をしながら一方では書いてゐるといふ夢であつた。

章は第一章と十一章であつたやうにおもふ。歎異抄は私の二十六才の夏以来、私の心にしみついてゐるお聖教である。その歎異抄が夢にまであらはれて来るといへば、私はよほど殊勝な者であるかのやうにきこえる。併し実は殊勝でも何でもない。たま／＼こんな夢を見たのは、私としては珍らしいことである。

衆生、殊に此の私のいのちの底に徹して来る。生き甲斐もないと思はれる無能無力の私が、そこに生かされて行く。不思議の中の不思議である。

降魔の印、といへば、勇ましい積尊のお姿である。ゲエテのフアウストは、大地の霊を呼び出して、その姿におそれるやうであるが、釈尊は地神を呼んで、一切煩惱の世界を整へさせられた。

仏陀の力は大地の底に徹する。無間地獄の底の底まで徹する。転向した阿闍世王は、一切衆生のために無量劫にわたつて地獄の火の中に苦しむことを厭はないと言ふ。そこには仏陀の無限の力が徹してゐる。

あ、三昧・降魔・転法輪の仏陀の御すがた、その御すがたのことを説いてゐる夢を見た、私にも仏の御力がひびいてゐるのである。夢の世界にまで一貫する仏陀のいのちを私は何と言つて宜いであらうか。夢は現実に通ずる。目ざめて後の私にも、此の夢の力、否仏陀の力は一貫してはたらくのである。

十二月二十六日の晝方には富士山を夢に見た。二男と一諸に小さな丘に登つて、そこから富士山を眺めた。色々の方向から眺めた。富士が様々の姿に見えた。

東海道を行き来する度毎に私は富士の姿を仰ぐことを楽しみとしてゐる。色々の方向から見ればその姿が少しづつ

十一月十八日の夜明けよりもよほど前の時刻に、聴衆に仏像についてお話をする夢を見た。仏像における三昧の印、転法輪の印、降魔の印についてしきりに講話する夢であつた。これも私には珍らしい夢である。

併し三昧、転法輪、降魔といへば私には大変に親しみを感ぜられる仏様のお姿である。

法華經の無量義三昧から静かに立ちたまふ積尊のお姿、華嚴經の海印炳現三昧、殊に善財童子の師子奮迅三昧、または大無量壽經の積尊が、大寂定三昧に入りつきりの光顔麗々のお姿など、此の二三十年來、私の心に、深い親しみの仏様のお姿である。

転法輪のお姿といへば私には法隆寺金堂の壁画の弥陀尊のお姿が目にかんで来る。あの壁画も焼けてしまつた。あの火災のあとで佐伯定胤殿下に導かれて、かはりはてた壁画に対して無限の感に打たれたこともおもひ出される。その佐伯殿下も今は此の世にましまさぬ。此の世は此のま

まに夢のやうにも感ぜられる。併しながら仏陀の転法輪は夢ではない。此の夢の世に淋しく生きつづけてゐる私に、夢ならぬ転法輪の御声、正覺大音響流十方の御声がひびく。それはお念仏の声である。仏陀から出て、私の心にひびいて、その反響はお念仏となつて十方世界にひびきわたる。彌陀尊の眞実生命が、十方

變つて見える。私の詠じた富士山の歌も相当にたまつてゐる。併し本當に富士山にふさはしいやうな歌は一首も出来てゐない。煩惱の泥の中に浮き沈みしてゐる私には、崇高な富士を本當に詠する資格が無いのである。しかもその私に富士の姿はいつもなつかしく打仰がれる。雲や霧のためにその姿が見えないことも多いが、そんな時には

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ 面白き
といふ芭蕉の句をおもひ出しては自ら慰めて行くが、心の中は淋しい。

富士を仰ぐ私の心と、仏陀を仰ぐ私の心とが相通ずるかとおもふ。慈悲と智慧との光を仰がずには私は此の世に生きて行くことが出来ない。泥凡夫であればあるほど、悲智円満の仏陀を仰ぐ心が切実である。お念仏は泥の中から咲き出る蓮の花である。泥が蓮ではないけれども、蓮の花は泥の中から咲く。煩惱熾盛の時には願心も燃え立つて来る。そこに煩惱の泥の中からお念仏の蓮の花が咲き出でる。その私を仏陀は分陀利華と名づけたまふ。

富士を仰ぐ心は夢にも富士を仰ぐ。夢に仏の事を見る私は、煩惱の泥の中に在りながら仏陀のまことを身に受けて行く。私の生きて行く根本はこれより外にないのである。

昭和三十年、八月八日、稿

歎異鈔の何處

池山榮吉

聖人の警咳に接す

聖人の言葉が一番多く出てゐるのは、いふまでもなく修行信証であります。それは聖人の筆に成つたもので、本鈔にみるやうな口づからの常の仰せではありません。

しかるに歎異鈔は『親鸞聖人御物語のおもむき、耳の底に留るところ』をしるしたのでありますから、これこそ真に聖人の警咳に接するの思ひがあつて、聖人平生の信的氣分の律動をうかがへる、唯一無二の宝典と見られるのであります。

歎異鈔のどこか

一体歎異鈔は、いはば純金の塊みたるやうなもので、そのうちの一部を取つてみれば、全体がわかるので、歎異鈔のどこにも、かしこにも、歎異抄の全体が含まれてゐるのであります。

歎異鈔は全体を読まなくてはわからないものではない、また全体を読んでも必しもわかるものではない。要は一点

『弥陀の誓願不思議』もこれから出た。

『念仏申さんとおもひたつ心』もこれから出る。

『攝取不捨の利益』も、『如来よりたまはりたる信心』も、『無碍の一道』も、『非行非善』も、『無義為義』も、『親鸞におきてはただ念仏して』も、『善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや』も、『親鸞もこの不審ありつるに』も、『親鸞一人がためなりけり』も、いやしくも絶対他力そのものの顕現である限り、一つとしてこれから生じたのではないものはありません。

本願とは

そも／＼本願とは、我身にまつはる罪業の重みに、迷ひの苦海に沈論したまま、永劫に浮ひ上る機会のない衆生を、悟の境涯に救ひ出してやりたい、救ひ出さすばおくまい、といふ如来大悲の意志であり、力であります。この本願の働きで、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生がたすかるのであります。

罪惡の自覺

罪惡深重、煩惱熾盛の実感がないと、ピツタリ本願に出遭ふことは出来ません。さうでない限り如来の御心と私共の心とはつながりません。自分の力でどうすることも出来ない自分である。とわかつたところに本願が要る。絶対の他力が要る。それに気づ

か(一)

その精髓に浸透するかしないかに係るのであります。

不磨の現実性

歎異鈔の文句は頗る古典的でありますが、その内容はまことに生き生きとした新味にみちてゐます。それは古今を通じてかはらない不磨の現実性にもとづくからであります

本鈔一卷の核

『そのゆゑは罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがため願にてまします』

私は本鈔を拜読して、この文のところにいたるたんび、ああここが大本だといふ感に打たれます。これこそ実に歎異鈔一卷の核であり、骨子であります。独り本鈔のそれであるばかりでなく、他力淨土の教一般のそれであります。

それもそのはづです。法蔵菩薩の目的、如来弥陀の御思召、即、本願がそれなのであります。

かない人には、本願は猫に小判であります。

さて自分の罪の深さ、まどひの強さに泌々きつて、しかもどうすることも出来ない。

『わが身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねに沈み、つねに流転して、出離の縁あることなし』と、思ひしられて、ここに他力絶対の救済がなくてはならないものとなります。

さうと思ひ知れない限り、わがはからひ、所謂自力の奮動はやみません。自力の奮動する領域には他力の影はさしません。

裏からいふと……実はかう言つた方がより正しいのです……松蔭の暗きは月の光かな、で、弥陀の光明に照らされる胸の底に『地獄は一定すみかぞかし』の諦めが目覚め、『他力の悲願はかくのごときの我等がためなりけり』の確信が萌すのであります。

馬耳東風

信仰の話をききながら、右の耳からはいつたことが、左の耳から筒抜けてゆくかのやうに、心に響くところのないのは、畢竟、自分といふものが、よくつきとめられてゐないから、話が自然自分に触れない。従つて聞き方が上の空になる、耳に聞いて心にきかないといふ風になるからです

ニイチエの警告

ニイチエは『ツアラツストラ』の中に言つてゐます。

『君方は超人を信じてといふのかね？ けれども超人がなんだね！』

君方は超人の信者だといふがね、一体信者といふものが何だね！

君方は君方を探したことがなかつたぢやないか、だのに超人を見出したんだ。

信者といふのがみんなさうなんだ。だから信仰といふものがみな駄目なんだ』

『今時の道俗、己が分を思量せよ！』と聖人は私共に注意を喚起されます。

信仰は己を知るを以てはじまるのであります。己を知ることがいよいよ深ければ深いほど、信仰の対象、絶対他力はますます己に近づいて来、絶対他力が近よるに從つて、己の相が層一層ハツキリと見えてくる。斯くて、己と他力とがピッタリ出遇つて、幽蓋相応したところが、信仰の極致であり、時尅の極促であつて、ここに至つて初めて、己の何たる、他力の何たるが了解されるのであります。

今までただ偶然にあるもののやうに思つてゐた絶対他

りません。

かの法華經の七大譬喩の一つとして名高い、火宅の譬、火のまはつた家の中に居ながら、危険の身に迫るものもしらず、焼きつく痛苦をいとひもせず、てんでに、好きな遊びに氣をとられて脱れようもしない我が子達を、どうかして外に出させ、生きさせたいと、とつおいつ工夫をこらす、年老いた長者の焦慮も想はれます。

凡夫われに縁なき仏

ところで私は我々をどうして救はうとせられるであらうか。我々は一休どうしたら救はれるであらうか。

サア、そこが仏の威力と我々の価値とが問題になるところで、仏の威力の強弱と価値の多少によつて、さまざまの可能性があらはれるわけです。

一体、仏となるには、仏となる種がなくてはならない道理です。例へば、仏と成り得る直接の原因としては六度の行があります。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、の六つの行がそれでありませう。

若し我々が独立して、これらの行を完全にやつて行くことが出来れば、だれのお世話にもならず、ひとりで仏となる事が出来るでせう。

又たとへ全部は出来なくても、その中の一つなり、半分なりが出来るならば、仏力の加護と相俟つて、漸次に向上

力、換言すれば、弥陀、本願、念仏等は、さうではなくて、所謂『為物』すなはち、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生、この自分をたすけん為に存在するのであつた。如来と自分とは、切つても切れない、離れようとて離れられない、不可分の必然であると確信されて、この世からなる未曾有の天地がひらけてくるのが、絶対他力の信的生活であります。

仏の本意

眼を仏界に転じませう。

『煩惱の黒雲はやく晴れ、法性の覚月すみやかに現れて』といふ、不生不滅の境界から『無明煩惱しげくして、塵数のごとく遍満する』生死流転の間の中をうろつく、われわれ衆生を眺めたとしたらどうでせう。

難破した船をみかけては、それに乗つてゐる人々の溺死を坐視するには忍びない。

無心にレールの上を遊んでゐて、轟々と押し寄せる車の音にも驚かない頑足ない子供を見ては、安全地帯に抱き出してやらすにはあられない。それが犬の子であつても見殺しには出来ない。

我々自利を主とする人間ですらさうであります。況んや智慧あきらかに達し、慈悲まどかに満ち給ふ仏に於てをやです。『苦惱の旧里』、『火宅無常』の中から、我々衆生を救ひ出してやりたいといふのが、仏の本意でない筈はあ

の地盤を築き上げて、いつかは仏果にすすむこともありません。

よしんば菩薩の行とまでゆかずとも、せめて世間普通の道徳の一つである孝養父母、奉事師長といつたやうなことが満足に行へたら、それを種とし、縁として救ひ上げようと、手ぐすねひいて待ち構へる仏もいないでせう。

さあどうせうか

が、いかにせん。人はいざ私の如きは、布施持戒を行ぜんに余りに慳貪破戒であり、忍辱精進を行ずるとしては余りに乱想であり、愚痴であつて、禪定、智慧を行ずるなど、とてもおもひもよらない。

孝養父母、奉事師長なども、形の上ではいくら誤聞かせるとしても、本当のところはとも出来ないといふ状態をざるを得ない。

ここに、仏に救ひ上げらるべく、髮一筋の手がかりに持合さない縁なき衆生とあきらめるの外はない。

キリスト教では唯一神だが、仏教には無数の仏がある。

さて無数の仏はまじまじしても、仏と云ふ仏が、どれもこれも、救ひの手がかりとして、何かすこしでも或る善い事をこちらに注文されるとしたら、これは私にとつては縁なき仏である。

阿弥陀仏とは

私達のあるがままで救つてくれる仏もがな、との歎きな
きあたはずである。この無理とも背理ともいひやうのな
い、また固より本気の沙汰で言ふのでもない註文を、私ど
ものしらない前から、チャンと御自分の願望とせられ「願
もつて力を成じ、力もつて願を就じ」ちからとのぞみとひ
つたり叶つて、自分の狂ひのないやうに、願力を成就され
たのが阿弥陀仏でましますのであります。

願力無窮にましますれば 罪障深重もおもからず
仏智無辺にましますれば 散乱放逸もすてられず
大悟の域に達したいといふ人間至高の理想が具体化し、
人格化したのが仏であるやうに、衆生を済度したいといふ
諸仏に通ずる理想が具体化し、人格化したのが阿弥陀仏で
あると言つてよいと思ひます。

実に阿弥陀仏こそ、釈尊も称嘆せられた通り「威神光明
最尊第一」で、真に仏の中の仏と仰がれるのであります。

この私の仏

阿弥陀仏は、わしはかうして仏になつた。おまへがたも
精出してかうなるがよいと、ただ成仏の範を示すだけの仏
ではない。またアメリカあたりで募金の際、所定の半分を
募集せよ、あと半分はわしが出してやらう、と約束する金
満家と同じやうに、こつちの持合はす善根に力を添へよう
といふ仏でもないのです。

ヂヤータカ物語

猿王物語

それはお釈迦様が古い過去の世にヒマラヤの山奥の猿の
王としてお生れになつた時の事でありました。

ある時、この猿は一人の獵師に捕へられ、ハラナといふ
国の王様に献上されました。そして長く王宮に住む間によ
く王様に仕へて怠らず、人間の世界で行はれてゐる様々の
ならはしもすつかりおぼえてしまひました。王様は彼の誠
実な奉仕を歎び愛でて、先に彼を捕へた獵師を呼び出し
「この猿を捕へたもの場所につれて行つて放してやれ」
と命じました。

この様にして彼が久し振りに故郷の山奥へ帰つて来ると
その事を知つた猿の群は喜びの叫びをあげながら大きな岩
の上を集つて来ました。そして口々に歓迎の言葉を述べて
から、

「一体あなたはこんなに長い間どこに居られたのですか。」
「ハラナの王宮に居たのだ。」

「そしてどうして放してもらつたのですか。」

何から何まで向ふ持で、迎へ取らずにおかないと、うま
ずたゆまず、こつちに向ひつつある仏であります。阿弥陀
仏は無力の者にうつてつけの仏であり、阿弥陀仏はこの私
の仏なのであります。

生きた理想

阿弥陀仏はかうした仏であると、言葉通りただ概念的に
理解しただけでは、それはまだ想像で作りあげた人形たる
にとどまります。

その仏が信じられ、その本願が信じられ、その本願の不
可思議の加威力が信じられるに至つて、ここにはじめて、
その人形にたましひがはいつて血が通ひ、脈をうち、生き
た理想となり、力となるのであります。

未完

大心光

無得院 釈一道居士

衆生かはいや 生死の海に
おのが罪から 浮き沈み
久遠このかた 子故の廻向
わたしひとり をかたおもひ

(南傳大藏經、抄出。)

「王は私がよく仕へたのでそれを嘉して放してくれたのだ
よ。」

等と色々話し合ふ内に猿共は彼に「それではあなたは人
間の世界で行はれてゐる色々の習慣を憶へて来られたでせ
う。私共にも話して聞かせて下さいませんか。」と云ひ出
しました。彼は「人間の世界のならはしをたづねはなてら
ぬ」と堅く止めましたが、猿共があまり聞く事をせがみま
すので次のやうに語り出しました。

「人間といふものは、身分の高い者も低い者も、富める者
も貧しい者も、誰も彼も、自分のものだ自分のものだと云
つて執着して、有るものは無くなるといふ無常のことわり
を知らないてゐる。さあ彼等の暗愚な暮しをよく耳に入れ
てお聞き。」

と云つて次の偈文を唱へました。

こはわが黄金、こは我が宝物、と
これぞ、人の世の明け暮れの言葉なり。

むさぼりの人の心に、
きよらなる法は見られじ

これを聞くや猿共は「もう云はないで下さい。もう沢山です。耳にすべきでないことを聞いてしまひました。」と言つて両手で耳をかたく覆つて「この場所では我々は浅聞しいことを聞いてしまつた。」と口々に云つてその場所をも眺つて他の所へ去つて行きました。又その平たい岩には『ガラヒタ（詭譎）平岩』といふ名さへついでにしまつたといふ事でありませぬ。

以上のお話はお釈迦様が祇園精舎においでになりました時、お弟子の一人が煩惱の為に心たのしみます鬱々として悩んでゐるのを哀れとみそなはして「比丘よ、この煩惱といふものは、前生に畜生共にすられたものだ。汝はかゝる仏の教に従つて出家しながら、なほも畜生さへ眺つたその迷ひの為に不満を覚えてゐるのか」と仰せになつてお聞かせになつた御法話であります。

鋤賢人物語

その昔、お釈迦様が遠い過去の世に菩薩として道を修めておいでになつた時の事です。菩薩は貧しい農家に生れて「鋤賢人」と呼ばれてゐまし

「我勝てり、我勝てり。」

と獅子の吼えるやうな声で三度叫びました。折しもその国の王は国境の叛乱を平定しての帰途、ガンジス河の流れで頭髮を洗ひ、凱戦の王としてのあらゆる盛装をこらして象の背に乗つてやつて来ました。そしてこの菩薩の叫び声を聞いて不思議に思ひ家来の者に、「あの男は『我勝てり』と叫んでゐる。一体誰を征服したのだから。彼を呼べ。」と云ひつけて菩薩を呼び寄せました。「お、予は今勝利者である。予の国を乱す者を征服して帰る途中である。汝は一体誰を征服したといふのか。」「大王よ、あなたは千の勝利、否百千の勝利を得られても、煩惱を征服せられないならばまことの勝利ではありません。私は今こそ貪欲の心を征服したのであります。」かくて菩薩は自在の悟りの境地から国王に法を説いて次の偈文を唱へられました。

『よし幸運にも、ひとたび勝つことあるも
やがてまた征服せらるる勝利は、
まことの勝利ではない。
ひとたび勝ちて、征服せられることのない勝利こそ
まことの勝利である！』

国王は、この大説法を聞いて、自分の思ひ到ることの出

た。彼は毎日一本の鋤で土地を耕して野菜、南瓜、瓢箪、胡瓜などを蒔いて作り、これを売つて細々と暮しを立て、をりました。実にこの一本の鋤が彼の唯一の財産とも云ふべきものであります。

ある日彼は人の世の営みの味気なさを感じて、出家しようとして立ちました。そこで大切な鋤をかくしておいて家を捨て、出家の生活にはいりました。併しあの唯一の持物であつた鋤の事が思ひ出されてならず、貪欲の心を抑へる事が出来ないで遂にその鈍刃の鋤の為に出家の生活をやめてしまひました。このやうにして二度三度と六度までかの鋤をかくしておいて出家しましたが、それでもなほ鋤の為に又元の生活に引き戻されてしまひました。

遂に彼はつくづく思ひました。わしはこの粗末な鈍刃の鋤のために六度も道を求める心を捨て去つた。わしの様な心の拙い者は鋤をかくして出家したのでは幾度これをくりかへしてもこの一本の農具への執着の為に迷ひ続けて行かねばならない。今こそこれをガンジスの大河に投げ棄て、出家しよう……

そこで河岸へ行きましたが、今後この鋤が落ちた場所を見ると、又戻つて来てこれを引き揚げ度いといふ心が起るにちがひない……と気付きましたので、その鋤の柄をつかんで、象のやうな大力を出して頭の上で三度振り廻し、眼をつむつて大河の真中へ投げ込んで、

来なかつた、真実の世界に心ひらかれて、尊い法の道に生きるやうになりました。

この物語は、お釈迦様が祇園精舎においでになりました時、一人のお弟子が、強い執着心のために、六度まで心が迷つて精舎を去り、七度お釈迦様の御許に戻つて、始めて心眼を開き得た時、沢山のお弟子に過去世のことをお話しになつて、如何に貪欲の心の制御がたいかをお説きになつたものであります。

白ひき歌 盤珪国師

鬼の心であつめた金を、がきにとられて目がまうた
地獄ぎらいの、極楽すきで 楽な世界に苦をうけた
冬の頃しも悦ぶたき火、夏のくるほどあらいや
夏の頃しも乏しき風も、秋の果てぬに早やくむ
人にかたきは、もと無きものぢや、是非を争ふわれが
なる
悪を嫌ふを善じやと思ふ、嫌ふ心が悪じやもの
としはよれども心はよらじ、いつも変らぬこの心

編集後記

爽涼の秋となり、草も木もみのり、河水も澄む頃となり灯火の下、求道の旅に絶好の季節となりました。本年の夏は格別の暑さでありましたが、私はお蔭で小康を恵まれて居りますが、八月に富山県井波町の長谷師の寺に、吉田仁一郎さんに護られて迎へられ送られて六日間の旅を無事に終へました。旧知の師友と七年振りに会し感無量でありました。

八月二十四日夜は京都への途次を福島先生に御一泊お願ひ申し「往き易くして人無し」との題で大経の御講話をして頂きました。

△三周忌に近角先生を想ふ、の柳瀬様の原稿はまことに先生の体温をぢかに感得される、そのまま仏心に触れることの出来る、有難い信味を頂きました。柳瀬留治様の御住所は、東京都渋谷区代々木本町七三一、短歌草原社で

あります。

△福島先生の「夢の感想」はまことに無限の教をそこに汲むことが出来ます。昔から「夢がうつつか、うつつか夢か」とよく申しますが、私共がさめた現実には夢ではないと力んでゐるまんま、一瞬の夢であり、夢も、夢であるまんま現実以上の真実に触れることがあります。さう云う夢は、夢のまんま夢でないのでありませう。先生の御住所は東京都調布市仙川町七九四であります。

△歎異抄の何処か、の池山先生の御原稿は、「信を行く旅人」の旧著から抜き書きさせて頂きました。先生の御著書中、絶対他力と体験、仏と人、は再版されましたが、信を行く旅人がまだ再版されませぬ。又先生の独文歎異抄は只今ベルリンで山田幸さんが出版の交渉を続けられて居ります。又同市にピーパー師、リンケ師等を中心として数十名の歎異抄の讃仰者も出来、欧州唯一の真宗の基点を作りたい由、ピーパー師から大谷光照師に依頼して来て居ります。いづれ近く先生の両書が京都とベルリンで再版される日を待つて居ります。

聚墨生

御案内

毎月、第一、二、三日曜、午後一時半。日曜講話。一道会館。

市電、新郷通一丁目下車、東へ一丁。名鉄、呼続駅下車。徒歩約十分。

毎月廿四日、午前、午後。法話会
昭和区小櫻町、教西寺

九月二十五日、十月二十三日、午前十時より
岡崎東別院内、同朋会館。岡崎市中町。

歎異抄二条と三条講話

九月、十月、十二月、各十三日、午前、午後。
熱田区樺野町、願入寺。本典講話。

定価 一部 十七四（送共）

半年 百四（送共）

一年 二百四（送共）

編集・発行人 花田正夫

名古屋市南区匠上町二ノ二八

印刷人 奥川正生

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番